

労働とオルタナティブ / 労働のオルタナティブ

小倉利丸

2009/7/20

オルタナティブ社会の構想と労働の位置づけ

「経済」とは、生存に必要な条件を充足するための社会システムである。この意味での「経済」を資本主義経済は達成できていないという意味においては、明らかに限界と本質的な欠陥をもつ。

資本主義経済とは、利潤を目的とする資本が「経済」を支配する社会体制である。支配的な「経済学」は、資本の利潤動機による行動が「経済」の生存条件をもっとも最適な水準で充足できることを証明するための「科学」として発達してきた。「労働」は、原料や機械とならんで、生産の単なる「要素」でしかないものとして位置付けられる。したがって、労働者に支払われる賃金は、「コスト」でしかなく、労働者にとって労働がどのような「意味」をもつのかとか、賃金が労働者の生活にとってどのように「必要」なのかといった問題は、主要な課題にはならない。

支配的な経済学では、労働者の抵抗は、コスト（最近の言い回しでは「リスク」でもある）として意識され、合理化と機械化の動機を資本に与える。労働者の抵抗が資本主義の偽術革新と経済成長、景気循環と密接に関わるのだが、こうした「主体」の作用は隠蔽されて、進歩と成長は資本の本質とされるが、実は、労働者の抵抗への資本の対抗戦略としての技術革新という側面が無視されている。

労働者の抵抗は、「コスト」であり「生産要素」でしかないという扱いと、この扱いがもたらす長時間労働と過酷な労働への抵抗の根拠には二つの矛盾する要素が共存している。ひとつは、資本による労働の支配が労働者の過酷な環境をもたらしているのだから、資本の支配から職場を労働者の自主的な管理へと転換すべきだ、という主張がある。ここでは、「労働」それじたいの意義は問われない。

熟練を必要とする労働や資本主義において比較的高い意義を与えられている労働の場合は、こうした主張につながる可能性がある。もうひとつは、資本が支配するなかで構築された労働そのものが意味のない労働であって、こうした労働それ自体を再考することが必要だから、資本の支配のもとで構築された労働そのものの見直し、あるいは廃絶が必要であるという主張がある。後者の主張は、少数派であるが、こうした主張は、反グローバリズム運動のなかで、労働運動がラジカルなエコロジストの運動と接するなかで、また、60年代、70年代のカウンターカルチャーを通じて、あるいは、障害者解放運動や失業者の運動を通じて、徐々に自覚化されてきた。

資本主義の労働批判の理論的、思想的な枠組みとして、マルクスの資本主義批判は、多くの限界をもつとはいえ、労働価値説と搾取の理論を提起した点で基本的なパラダイムとしての位置を今

でももっている。つまり、資本はどのようなメカニズムで利潤を獲得しているのかを説明する論理として、唯一支配的な経済学に対抗できるパラダイムを提起できているのは搾取理論だけである。マルクスは、資本主義批判と労働者階級の解放の戦略を定めるために、労働のなかでも抽象的人間労働としての労働の剰余労働に焦点を定めた。そして、商品の価値（交換価値）への批判と長時間労働、技術革新（資本の有機的構成高度化の蓄積）に対しては立ち入った批判を展開した。しかし、商品の使用価値と具体的有用労働、必要労働時間をめぐる問題は見逃された。その結果、商品の使用価値が消費過程を通じて労働力再生産過程に入り込んで形成するライフスタイルと労働力再生産労働の問題が無視され、同時に、労働市場がジェンダーやエスニシティの条件によって分節化されることなど階級、ジェンダー、エスニシティの相互の関係も見逃されたし、ルンペンプロレタリアートへの低い評価もある。これらは、プロレタリアート内部にジェンダー、エスニシティ、労働者階級内部に相互の対立と確執をもたらすイデオロギーの形成につながってしまった。また、マルクスにとって、非西欧世界や植民地主義の問題は、中心的な課題ではなかった。インドへの言及は多いとはいえ、ハイチ革命もラテンアメリカへの言及もほとんどみいだせない。

マルクス主義のその後の展開のなかで、植民地の問題は 20 世紀初頭の共産主義運動の重要な課題となる。マルクス主義は、社会主義圏における支配のイデオロギーとして抑圧を正当化する道具となる一方で、グラムシやフランクフルト学派のように 20 世紀を通じて、マルクス主義内部のオルタナティブは常に存在した。戦後には、植民地解放闘争、新左翼運動の高揚、社会主義圏内部の左翼反対派知識人の登場、新従属論、家事労働論、エスニシティに注目した労働市場分析など、マルクス主義の左翼からの批判と拡張の試みが登場し、その後「ポストモダニズム」の議論のなかで、文化やイデオロギーとマルクス主義の再構成に関心が集まる。

資本主義のオルタナティブをめぐると議論では、マルクス主義のパラダイムは常に、不可欠の参照点をなし、資本主義批判のための共通の知識の基盤を形成していた。マルクスの搾取論には功罪があるが、資本主義批判の理論的な分析のパラダイムとしての役割を終わらせるに値するマルクス主義にかわるパラダイムをもたらすような新しいパラダイムの創出は未だに見出せていない。

その一方で、既成事実としての市場と国家を与件として現状を正当化する資本主義擁護の思想と理論は、アカデミズムにおいてもいわゆる「市民社会」においても、政治の政策の現場においても、討議の与件としてすべての人々が受け入れざるを得ないような共通の知識の位置を占めてきた。この状況を変えるというイデオロギー、思想、理論の分野における闘争がまったく不十分である。私たちは敵の土俵でしか闘えず、自らの思想や理論の言葉を封じられている。現実世界では真の意味での思想・信条の自由などはない。こうした支配的な思想と理論に対して、かれらの言葉で語るのではなく、彼らには通訳不可能な私たちの言葉を取り戻さなければならない。

オルタナティブの討議をこうした思想や理論の領域で滞らせている一つの要因に、社会主義圏や共産党あるいはマルクス主義政治組織によるイデオロギー支配や粛正の問題がある。言論・表現

の自由は、資本主義よりもむしろ 20 世紀の社会主義圏、あるいは左翼内部では大きな制約を課されてきたことは事実だ。したがって、オルタナティブの討論は、マルクス主義内部がこれまで抱えてきた思想や理論の自由への制約に対して、徹底した批判、検証、総括が必要であり、資本主義的な自由を超える「自由」を獲得する可能性を探ることが必要である。このことを通じてマルクス主義そのものが資本主義の廃絶とともに廃棄される思想であることを明確にしたほうがいい。いや、そもそも思想、哲学、科学といった知識や学問それじたいが権威を剥ぎ取られて、野に帰る道をさぐる必要があるだろう。

オルタナティブの討議は、こうした理論と思想のオルタナティブを射程にいれたパラダイムの転換の模索がなされないのであれば、世界を新しい姿で私たちが見出すことはできまい。

以下は、今日の報告のための「メニュー」。すべての「料理」を提供するわけではありません。

(1) 労働者と労働力

- ・労働市場 必須条件としての失業者の存在
- ・コストとしての労働力
- ・労働力商品化の廃棄と国家の廃絶
- ・ライフスタイルの革命 生きる意味と人間としての存在価値の創造

生きる意味がどのようなものであってはならないのか、人間の存在価値とはどのようなものであってはならないのか、という否定形の問いに答えることは可能だが、消去法で答えを導くことには限界がある。実践を通じた発見と創造の試行錯誤を通じて答えを模索する以外にない。

(2) 資本主義的労働の特殊性

- ・労働する身体の社会的構築過程としての「本源的蓄積」
- ・浮浪、怠惰の犯罪化 近代的な「労働」の形成
- ・自然を対象とする労働 モノを対象とする労働 ヒトを対象とする労働へ
- ・「商品」と生活世界の資本主義的秩序への統合

社会の物質的再生産

「物質」の意味づけ

ライフスタイルの意味づけ

- ・物的生産 情報/サービス化への展開を支える二つの要素
生産過程における労働者の主体性剥奪 熟練の解体 単純労働化 「労働」に関する知識の資本への移転
生産過程からの労働者の排除 生産の不確定要素の排除 機械化
市場の制御技術 買い手の不確定性への挑戦
- ・労働者の「能力」の変質 資本の精神性を内面化した労働者大衆の形成 イデオロギー領域の市場への統合

(3) マルクス

- ・疎外された労働
- ・搾取理論 剰余労働論の限界
- ・労働からの解放 自由時間論から労働それじたいからの解放へ

(4) 資本の倫理と労働の倫理

- ・速度
- ・予測可能性 (計画と結果の確定性)
- ・機械と労働

(5) 搾取のもう一つのパラダイム : 資本主義的労働 = 身体搾取

- ・剰余労働 = 剰余価値論の限界
- ・具体的有用労働それ自体がもたらす抑圧
- ・自由と労働

(6) 差別と労働

- ・労働の尊厳 労働の差異化
- ・ジェンダー
- ・エスニシティ
- ・労働から排除される人々

(7) 創造行為

- ・いまだ存在しないモノへ 闘争とは創造である
- ・既存の制度、文化、ライフスタイルに加担しないこととは ライフスタイルとしての闘争・文化
- ・創造行為としての資本主義的労働の拒否 自由な時間と空間をこじ開ける (資本から奪い返す)

(8) 労働とオルタナティブ社会

- ・速度と計画に対するオルタナティブ
- ・市場と国家に代替するものとは